

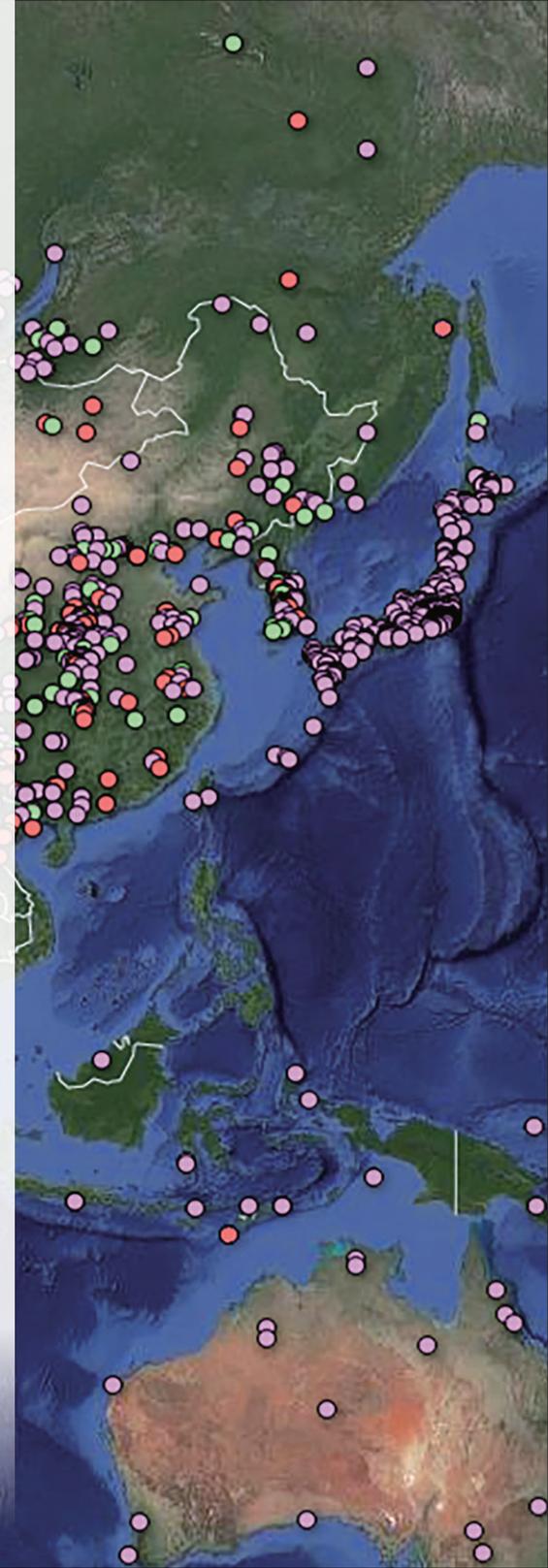
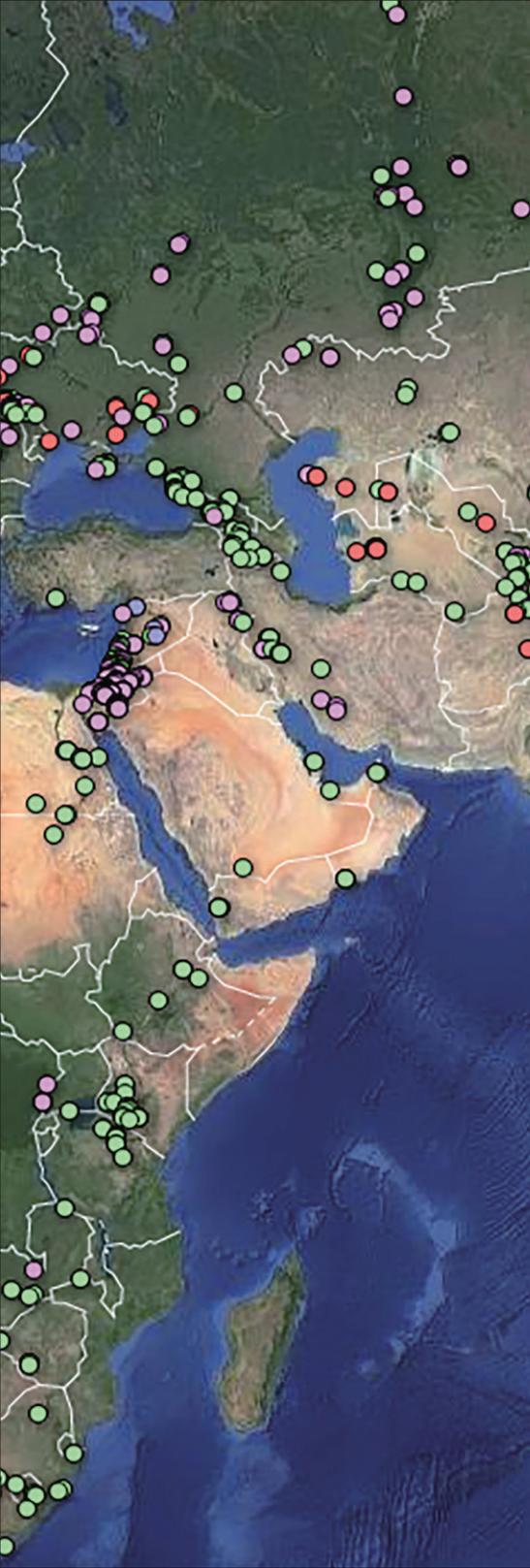
文部科学省 科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020

総括講演会「アジアの新人文化はどのように形成されたか？」

# パレオアジア文化史学

— アジア新人文化形成プロセスの総合的研究

二〇二二年 十二月四日（土） 午後一時～五時 【参加無料・オンラインライブ配信】



**【参加無料】** 2021年12月4日（土） 午後1:00～5:00  
Zoom webinarによるオンラインライブ配信で行います。

申し込み：下記のウェブサイトからお申し込みください。  
<https://paleoasia.peatix.com> 二次元コードからはこちら▶  
申込期限：12月3日（金） 午後1時



## ■プログラム

- 1:00-1:15 ごあいさつ・プロジェクト趣旨 西秋良宏
- 1:15-1:45 「新人のアジア拡散を調べるための遺跡データベース(PaleoAsiaDB)」 西秋良宏
- 1:45-2:15 「アジアに新人が拡散・定着した時期の遺跡調査」 門脇誠二
- 2:15-2:45 「新人がアジアに拡散・定着した時代の気候」 北川浩之
- 2:45-3:00 休憩
- 3:00-3:30 「民族誌の比較からみた文化の多様性と生態環境との関係」 野林厚志
- 3:30-4:00 「新人と旧人の生態文化的分布拡大の数理モデル(二重波モデル)」 若野友一郎
- 4:00-5:00 パネルディスカッション「アジアの新人文化はどのように形成されたか？」

## 【司会】

近藤 康久(総合地球環境学研究所・総括班)

## 【講演者】

- 西秋 良宏(東京大学 総合研究博物館・領域・計画研究A01代表)
- 門脇 誠二(名古屋大学 博物館・計画研究A02代表)
- 北川 浩之(名古屋大学 宇宙地球環境研究所・計画研究A03代表)
- 野林 厚志(国立民族学博物館・計画研究B01代表)
- 若野 友一郎(明治大学 総合数理学部・計画研究B02代表)

▶▶ パレオアジア文化史学の詳細は右記のウェブをご覧ください

パレオアジア  <http://paleoasia.jp/>

■講演会に関するお問い合わせ：名古屋大学博物館 門脇研究室 [kadowaki@num.nagoya-u.ac.jp](mailto:kadowaki@num.nagoya-u.ac.jp)

■主催：文部省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」総括班

ごあいさつ

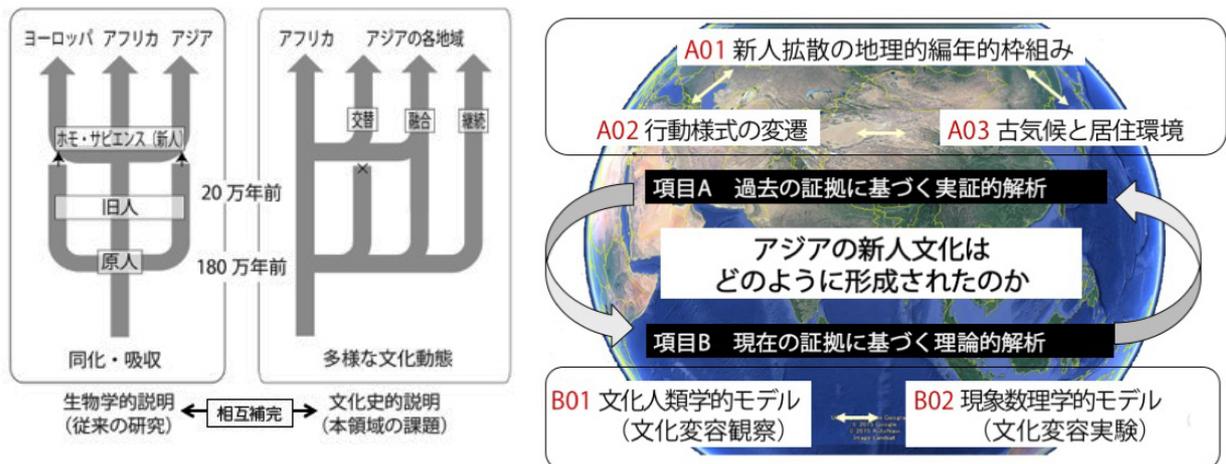
## 『パレオアジア』領域代表 西秋良宏

約 20～30 万年前のアフリカ大陸で誕生した新人（ホモ・サピエンス）は、その後、ユーラシア各地へと拡散し、先住者であった旧人たちを同化・吸収しながら「交替」した。日本列島人の直接の由来とも関わるこの人類史的イベントの原因や経緯の研究は、人類学・考古学諸分野において最も注目されるテーマの一つであり続けている。

文部科学省科学研究費補助金『パレオアジア』（2016-2020）は、新人がいつ、どのように拡散し定着したかを文化史的観点から説明しようというプロジェクトである。

新人の身体的起源はアフリカにあるにしても、彼らを特徴付ける文化もアフリカに起源したとは限らない。むしろ、アジア各地における新人文化形成プロセスは、新人・旧人の生物学的関係以上に、多様であったと思われる。本プロジェクトでは、その多様性を野外調査などをもとにした実証的研究と、現生民族誌や数理科学から得られる予測を総合した理論モデルによって説明することをめざしてすすめてきた。

研究領域は 2020 年度にひとたび完結し、本年度は、そのとりまとめと公開をおこなっている。文化形成の多様性を理論的に説明するとはどういうことなのか。難しく聞こえるかも知れない研究であるが、本シンポジウムにおいて、成果をできるだけかみくだいて紹介したい。

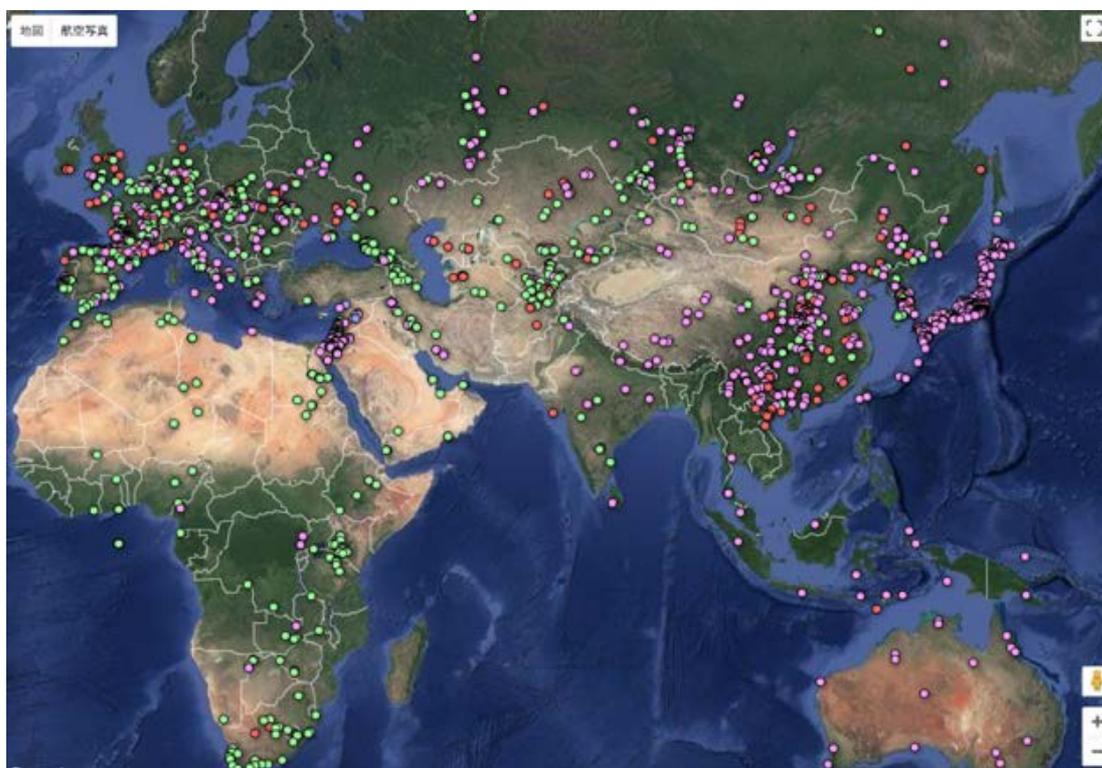


## 新人のアジア拡散を調べるための遺跡データベース (PaleoAsiaDB)

西秋良宏 (東京大学 総合研究博物館・領域/計画研究 A01 代表)

アフリカから出た新人がアジアにどのように拡散したかについては、これまで、多くの地図がえがかれてきた。インターネットで調べて見れば、実にたくさんの例をみることができる。それらには、遺伝学の成果に基づくものであったり、数少ない化石人骨発見地とその推定年代を点と点で結んだものが多い。では、数多く見つかっている遺跡とそこから出土した石器の情報で地図を作ったらどうなるのか。石器は文化の産物であって、かつ、はるかに豊富な証拠が残されているから、新人の拡散と彼らの文化的拡散、変容などのプロセスを面的にとらえられる可能性がある。

本プロジェクトでは、俯瞰的、鳥瞰的な把握を目指してアジアの中・後期旧石器時代(約20～2万年前)の遺跡や石器群についての大型データベースを作成した。これをパレオアジア・データベース (PaleoAsiaDB) と名付け、現在までに、3000 遺跡、7000 以上の石器群情報が入力した。年代がわかっている遺跡がアジアには少ないから不明の点も多いのだが、このデータベースを使って新人がなしたアジアへの文化的拡散についてお話する。



## アジアに新人が拡散・定着した時期の遺跡調査

### 門脇誠二（名古屋大学 博物館・計画研究 A02 代表）

パレオアジア文化史学プロジェクトでは、新人がアフリカからアジアに拡散し定着していった時代の遺跡や資料の現地調査を各地で行ってきた。主な調査地は、西アジアではヨルダンとオマーン、アゼルバイジャン、中央アジアではウズベキスタンとカザフスタン、南アジアではパキスタンとインド、北アジアではモンゴル、東南アジアではインドネシア、そして東アジアでは中国と日本である。

遺跡調査では、当時の人類が用いた道具（主に石器）や装飾品、食料とした動物遺存体などが収集された。また、遺跡の年代や古環境、資源利用行動などを共同調査するために、地球科学や文化人類学、数理科学を専門とする他の計画研究班のメンバーも遺跡調査に参加した。収集された資料やサンプルは現地および日本において分析を行い、当時の人類の行動様式（道具製作、資源利用、居住・移動、社会関係など）がいつ、どのように変化したのかを調べた。

これまでの結果、アジアに新人が拡散・定着した頃の人類行動は、主に北ルートと南ルートで内容に違いがあることが確かめられた。その一方、行動が変化したプロセスには 2 つの段階があったことを北ルートの各地において確認した。この 2 段階の文化変化が南ルートでもあったかどうかを確かめることが今後の課題である。



パレオアジア文化史学プロジェクトのメンバーがこれまでに調査した海外の遺跡。

## 新人がアジアに拡散・定着した時代の気候

北川浩之（名古屋大学 宇宙地球環境研究所・計画研究 A03 代表）

気候や環境はホモ・サピエンスの拡散、行動様式や文化を規定する重要な要素である。アフリカ起源のホモ・サピエンスがアジア各地へ進出する過程に気候や環境が関与している可能性が指摘されている。近年、アフリカ北部と東部、およびユーラシア大陸での古気候情報が蓄積されてきた。しかし、アフリカからアジアへの進出のタイミング、回数、ルートなどを厳密に検討するために必要な高い時間・空間解像度での古気候データが欠如している。ホモ・サピエンスのアジアでの拡散についての諸仮説を検証するためには、更新世及び完新世におけるアジア各地の気候変動復元をしていく必要がある。

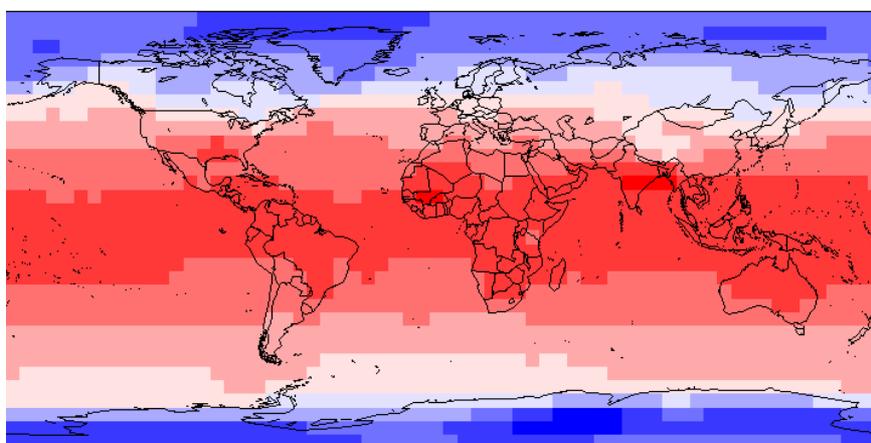
パレオアジア文化史学プロジェクトでは、ホモ・サピエンスのアジア進出に重要なイスラエルやモンゴルの湖底堆積物の各種分析を行い気候復元データの蓄積を進めるとともに、コンピュータモデルを使った過去の気候再現を実施してきた。これらのデータをもとに、ホモ・サピエンスのユーラシア各地への進出について考える。



国際陸上科学掘削計画死海深層掘削



モンゴル北部・サンギンダライ湖での掘削



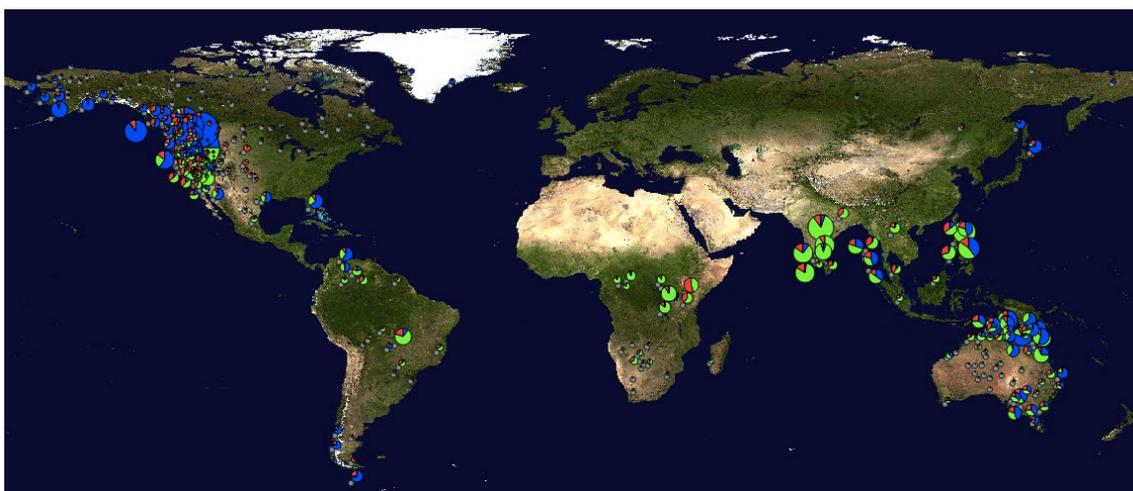
古気候シミュレーター（グリッド対応型統合地球システムモデル）で再現された最終氷期の年平均気温

## 民族誌の比較からみた文化の多様性と生態環境との関係

野林厚志（国立民族学博物館・計画研究 B01 代表）

アジアにおける新人拡散の過程は、自然環境の影響を大きく受けていた可能性が強いとされてきた。一般に生物集団は自然環境に適応できた場合に、ニッチ（生態学的地位）を確立するが、人間の場合は、生態学的な適応だけでなく、文化や社会がニッチの構築に大きく関係する。人間がどのような環境のもとで、どのような理由で、どのような行動をとり生活し、社会を築いてきたかを観察、記録し、それを具体的に説明することを強みとしてきた文化人類学や民族誌調査からは、過去を推測する手掛かりが得られることが期待される。

パレオアジア文化史学では、文化人類学、民族誌調査を中心に文化の多様性と生態環境との関係にアプローチし、さまざまな自然環境のもとで人間が適応している状況を具体的に明らかにしてきた。今回は狩猟採集集団の生業パターンと南北ユーラシアの環境との関係をてがかりに、文化の多様性と生態環境との関係を考える。



現在の狩猟採集集団の 100 km<sup>2</sup>あたりの人口と生業比（狩猟・採集・漁労）との関係  
円の大きさが人口規模、円の色分けが生業の種類（赤：狩猟、緑：採集、青：漁撈）

## 新人と旧人の生態文化的分布拡大の数理モデル（二重波モデル）

若野友一郎（明治大学 総合数理学部・計画研究 B02 代表）

パレオアジア文化史学プロジェクトでは、新人の遺伝的起源の問題に加えて、アジアへ拡散し定着していった新人の文化動態に着目している。新人の文化が、新人拡散ならびに旧人絶滅にどのような影響を与えたのかを、理論的な側面から研究した。

生態文化的分布拡大の数理モデル（二重波モデル）は、新人・旧人の分布域の拡大・縮小のダイナミクスを、両者の生態的ニッチの違いならびに文化の違いの2つの要因から説明する。文化は「環境収容力を高めるようなスキル」としてモデル化され、そのようなスキルを持つ個体の密度が高い時、その集団はより高い人口密度へと成長する。この数理モデルを解析すると、以下のような振る舞いを示す。まず新人は、その遺伝的起源の地であるアフリカから世界各地へと分布拡大する。これは新人と旧人の生態的ニッチによって駆動される波（第一波）である。新人の到来により、旧人は新人との競争の結果密度を少し減らしつつも共存する。次に、新人においてスキルの発明が行われ、高密度新人集団が現れる。高密度状態の新人が分布を拡大させると、その波は旧人を絶滅させながら進む。これは、新人と旧人の文化の違いによって駆動される波（第二波）である。つまり新人の分布拡大は単独の進行波ではなく、2段階に渡って起こる。

モデルが想定するスキルとして、上部旧石器時代における小石刃技法を仮定すると、ヨーロッパへの新人拡散の考古記録はスキルの単独起源で説明できるが、北アジアへの拡散の場合は、スキルの複数地起源を想定したほうが考古記録をよく説明することが分かった。また南アジアへの拡散では、スキルに相当するような明確な石器技術は存在しないが、海洋や森林への適応をスキルと想定することで二重波モデルがどのようなダイナミクスを示すかを調べることができる。広大なアジアにおける考古遺跡調査は本プロジェクトなどで現在進行中であり、報告数はまだ多くはないが、今後新たな遺跡調査結果が出たとき、それを解釈するための作業仮説として二重波モデルが提唱するシナリオが活用できる。

